

コミュニケーション

No.85

2013.3月号

【表紙写真】

シンリンオオカミのシン(下)のお嫁さん候補として仲間入りしたジュディー(上)。2頭仲むつまじい姿を見られたらラッキーです。

Contents

- P2 園長あいさつ、こんにちは！あかちゃん
- P3 移動動物の紹介、訃報、飼育動物数
- P4・5 **特集1 大森山動物園の挑戦**
- P6・7 **特集2 動物園40年
歩みを振り返り、そして未来を展望する。**
- P8・9 飼育レポート
- P9 動物病院から
- P10 動物脱出防止対策演習、イヌワシ繁殖検討委員会開催
- P11 イベントレポート、今後のイベント
- P12 飼育日誌、お客さまの声、かたばた通信

園長あいさつ

園長 小松 守



今年、大森山動物園は、開園40年の節目の年を迎えます。

大森山動物園の源は、戦後間もない昭和25年、秋田県が全国にさきがけて千秋公園に設立した児童会館の附属施設としての児童動物園にあります。経営はすぐに県から秋田市に移りましたが、その後、大森山公園の建設に併せ児童動物園の「こころ」が引き継いだ「こどもの国」を目玉として、現在の大森山動物園ができました。昭和48年のことでした。

開園の初期からここで仕事をさせていただいた身として、内からの感想で恐縮ですが、現在の動物園は当時と比較して大きく変貌を遂げました。時代の変化もありましょうが、大森山動物園を動かし続けてきた原動力は、動物園をご利用くださる多くの市民、お客さま、そして支援して下さる皆さまの笑顔と暖かい心です。大森山動物園は今、市民の大切な財産として認知され、期待度は益々大きくなってきているように思い

ます。入園者の笑顔は動物園スタッフの心に響き、仕事への意欲へと置き換わってきたのが感じます。お客さまの力です。市民、お客さまと共に創り上げてきた40年とも言えます。

大森山動物園は今、「動物と語らう森」というテーマを掲げ、人と動物の接点を大切にしながら、カサカサになりがちな人々の心を柔らかく包み込めるような動物園になりたいと考えています。自然科学的な視点だけで捉えられがちな動物園ですが、生命(動物)、自然との共生を大事にする日本人の深層にある優しさや寛容性を思い起こさせるような、人文学的側面をも大事にするやわらかな動物園でありたいと思います。

今年の干支は蛇、成長のシンボルとも言われる動物、平成22年に市民と共に創り上げた大森山自然動物園構想もいよいよ目に見えて動き出しますが、まさに新たな大森山へと変革の年でもあります。ハード整備とともに市民と共に大森山自然動物公園として変革させていこうとする思いを大切にしたいものです。家族や恋人たちが集う「幸せ時間」を体感できる場となるよう、秋田の動物園の新たなスタートの年にしたいものです。今年も大森山動物園、どうぞよろしくお願い申し上げます。

こんにちは!あかちゃん



コモンマーモセット

9月14日、ももが2頭の赤ちゃんを産みました。ももは、一昨年11月5日にメスのこもも、昨年4月7日に双子のオス蒼(あおい)とメス真桜(まお)を出産しており、わずか10ヶ月の間に3回の出産をしたこととなります。マーモセットの仲間は、普段は父親や兄弟が子を背負うなど、家族が子育てに協力的な事で知られていますが、旺盛な繁殖力には驚かされます。



ノドジロオマキザル

10月3日、ナナエ(22才)が通算10頭目となる赤ちゃんを産み、総数も10頭の大家族になりました。



コクチョウ

10月13日、展示場の隅で抱いていた卵から1羽のヒナが孵りました。ヒナが小さい頃は母親の背に上って隠れたり、両親に守られながら一緒に泳いだりします。



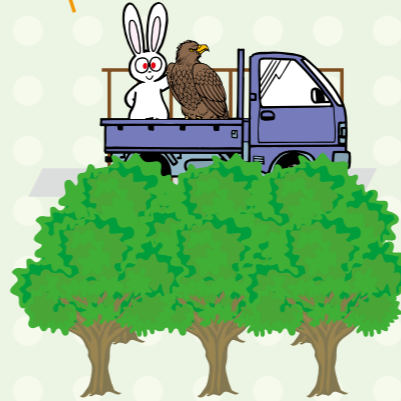
フラミンゴ

11月3日、チリーフラミンゴのヒナが孵化しました。チリーフラミンゴの繁殖は、実に19年ぶりのことです。ヒナは、寒冷期に入ったため、両親や他のペアと一緒に室内に移動して越冬させています。フラミンゴは、親鳥が分泌するフラミンゴミルクという赤い液体でヒナを育てます。

移動動物の紹介

仲間入りした動物たち

よろしくね!



モモアカノスリ(ハリスホーク)

10月16日、やや気性が荒かった前個体に代わり、おとなしいオス、アンディーが来園しました。さっそく担当者の腕に乗ってお客さまの前に出るなど、活躍を始めています。



中仙ジャンボウサギ

10月21日、秋田県大仙市にある第25回全国ジャンボウサギフェスティバル実行委員会から、共に生後3ヶ月のペアを寄贈していただきました。それぞれセツ(オス)とユキ(メス)と名付けられた2頭は、人懐っこくておでこをなでられるのが大好きです。いつか、セツとユキの子供が見られるといいですね。

仲間入りの予定の動物たち

シロフクロウ

今春までに、福岡市動物園から若いオスとメスがやってきます。

プレーリードッグ

今春までに、仲間入りする予定です。

大森山を後にした動物たち



元気だね!



1月16日、メスのシルバーがシロフクロウとの交換で福岡市動物園に転出しました。

飼育動物数 (平成24年12月末現在)

類	種数	点数
哺乳類	52種	322点
鳥類	43種	184点
は虫類	11種	45点
両生類	1種	2点
魚類	4種	83点
無脊椎動物	1種	6点
計	112種	642点

訃報

忘れないよ...



ミーアキャット

♂ナーガ4才

8月11日、オスのナーガ4才が動脈硬化による腹腔内出血で死亡しました。ナーガは、2009年に長崎バイオパークから当園にやって来ました。一緒に来たメスのサキとの間にオスのカネツグなどの子どもを残しています。



シロフクロウ

♀ゴマ16才

8月24日、メスのゴマ16才が暑さにより衰弱して死亡しました。ゴマは、2000年3月に東京都多摩動物公園から来園しました。メスの特徴である白地に黒の斑点がある体色からゴマと名付けられました。全身真っ白なオスのシロとは相性も良かったのですが、子宝には恵まれませんでした。



マーコール

♀ルー9才

8月25日、メスのルー9才が産後の衰弱による循環不全で死亡しました。ルーは、2004年11月に川崎市夢見ヶ崎動物公園から当園にやって来ました。一緒に来たオスのマーやその後のロールとの間に3頭の子どもを残しています。



ウサギ(ライオンラビット)

♂ベル3才

10月11日、オスのベル3才が慢性的呼吸器疾患で死亡しました。ベルは、フサフサの毛並みと人懐っこい性格で人気でした。2011年冬には、道の駅セリオンの「名誉副駅長」として勤務し、来館者に親しまれました。

大森山動物園の「挑戦」

見せる

触れる

体験する

大森山動物園では、「動物と語らう森」のテーマ実現のため、主役である動物たちの魅力を十分に感じてもらえるよう、「見せる」「触れる」「体験する」の充実を目指し、展示や様々なサービスの工夫を展開しています。

時には斬新な発想をしながら、現状に止まることなく常に進化するため挑戦し続けています。今回は、お客さまの笑顔のため、動物たちのすばらしさをもっと知ってもらうために日々試行錯誤しながら挑戦し続けるスタッフの熱い思いや苦労を綴ってもらいました。



動物パレード

飼育展示担当 渡辺 一

大森山動物園の大人気イベントの1つである「動物パレード」は、平成17年に始まりこれまで8年間開催しています。

主役の動物たちが普段入っている柵の中から飛び出し、手が届くほどの近くを練り歩きます。よちよち歩くペンギンや飼育員からはぐれないよう必死に後をつけて歩くヤギ、台車に乗って飼育員に引っ張られるウサギなど様々な動物たちが園路に登場します。

当初は年に1回、ペンギンやウサギ、ヤギ、ポニーなど8種類程度の動物が約250mのコースを歩く小さなイベントでしたが、動物を間近で見られることや一生懸命に歩こうとする動物



たちの様子がお客さまに大変好評となりました。

もっとお客さまに喜んでほしい、動物たちの魅力を伝えようと職員みんなでアイデアを出し合い検討を重ねた結果、昨年からは春に1回、秋に2回と回数も増やし、パレードコースも約500mまで延長しました。新たにイヌワシやラマなども仲間入りし13種類もの動物が参加するようになりました。

また、体験サービスの充実も図り、パレード終点での動物ふれあいタイムや記念撮影会、ミニクイズ大会などの企画も大人気となっています。

更に新たな試みとして、お客さまもパレードに参加し一緒に進行できるようになりました。

約1時間と短い時間のイベントですが、いつもは柵越しやガラス越しでしか見られない動物を身近に見て、感じてもらえるすばらしい企画だと思います。

今後も、更に楽しくなるよう、もっともっとアイデアを出し合い、お客さまが楽しく、飼育員も一緒に楽しめる動物パレードになるよう挑戦し続けたいと思います。

「挑戦」

移動動物園への取り組み

飼育展示担当 武藤 朱

当園では過去に“教育”を目的とした出前動物園を実施しています。主に秋田市内の小学校や児童会館等の子どもたちが多く集まる場所を会場に、ウサギやモルモット等の小動物やポニーを展示し、子どもたちと動物の“ふれあい”を通じた情操教育に貢献してきました。

これまでの取り組みに加え、今回新たに“中心市街地のにぎわい創出”を目的として移動動物園を実施しました。場所は秋田駅近くに昨年オープンした「エアなかいち」のにぎわい広場で、近隣には千秋公園やお堀があり自然豊かな立地です。反面、ビル群や交通量の多い大通りに面していて、これまでにない環境での開催とともに、レクリエーションとしても多彩なイベントが



求められ、動物園として“初めての挑戦”でした。実施に向けて、お客さまの安全確保と動物たちの安全、健康管理に細心の注意を払う必要があることから、念入りの事前準備を計画しました。

国内の移動動物園の現状を調査し、展示に適する動物の選定や輸送方



法、展示手法等の情報を集めたり、必要な資材等の経費算出や職員の業務分担の調整、関係機関との連携なども行いました。

膨大な準備作業では様々な課題にもぶつかり、急ぎの変更や修正も度々ありました。また、役割分担した業務間の連携も難しく、予想外に時間と経費がかかってしまう結果となりました。

第1回目の開催はクリスマス直前の12月22日。当日は敷地内で他のイベントも開催されており、多くの方が訪れていました。移動動物園会場にも、動物たちとの対面を心待ちにしている来場者がテントに集まり、新たな挑戦への期待が伺えました。

今回は7回開催し、約5,600人の方に来場いただきました。限られた環境の中で、来場者の方々が笑顔になっている様子を見て、初めての挑戦は“成功”したと感じました。

今回の実績を生かし、もっとお客さまに満足いただける、また、関わる職員も“大成功”と感じるような動物園となるよう更に挑戦し続けたいと思います。

「挑戦」

ゾウのエサやり体験

飼育展示担当 山上 昇



昨年4月から、お客さまへの新たなサービスとしてアフリカゾウへのエサやり体験を始めました。大型動物であるゾウをより近くで見学しながら、その迫力や鼻の器用さなど、ゾウの魅力を身近に感じてもらうために実施するものです。

ゾウ寝室内に臨時の柵を設置した特設会場にお客さまが入り、小さく切ったリングを60cm程度の細長い竹先に取り付け、目の前に立っている大迫力のゾウにエサを与えます。

大きな顔が目前に迫り、竹先まで伸びてくるゾウの鼻で、息づかいや鼻水、エサを採るとき器用な動きなどを間近で見ることが出来ます。

開始当初は、数量限定のこともあり混雑を回避するため園内放送せず、チラシ掲示等によるお知らせで実施しました。しかし、体験されるお客さまが少なく、準備していたエサも大量に残る始末でした。また、見学しているお客さまに参加を呼びかけても、有料と分

かるとその場を立ち去ってしまう光景が何度かありました。

このイベントを定着させるため、悪天候での実施や園内放送など新たなお知らせも行いましたが、なかなか思い通りにいかずただ時間だけが過ぎていきました。担当内でも改善策を何度も話し合い、辛抱強く続けていきました。

そのような努力のこいもあってか、子どもたちが夏休みに入ったあたりから徐々に定着し、サービス開始前からお客さまが行列している状態も見られ、参加者も少しずつ増えてきました。

これから動物園にご来園くださる皆さまが、ゾウをもっと身近に感じ、その迫力や魅力を発見し感動いただけるよう、この体験を更に充実させ満足いただけるようにしていきたいと思っています。

動物園40年 歩みを振り返り、 そして未来を展望する。

園長 小松 守



巻頭のあいさつでもふれましたが、大森山動物園は、昭和48年(1973年)9月1日の開園以来、40年の歴史を積み重ねてきました。今年はその節目の年に当たります。40周年のテーマは「つながり」です。これまでを振り返りながら、未来を展望してみたいと思います。

大森山動物園の始まりから振り返ります。都市公園法の成立を背景に全国的な公園整備が進められていた昭和40年代、秋田市も同様に大森山公園の整備に着手、コンセプトに「大森山こどもの国」を掲げました。その目玉は動物園建設でしたが、それは秋田市中心部にある千秋公園に当時あった児童動物園の移転が目的でした。

ここで着目したいのは、当時の児童動物園の成り立ちです。昭和25年(1950年)、創設者であった当時の秋田県知事の言葉、「こどもたちに光明を」が印象的です。こどもの心の育成が動物園の始まりでした。「大森山こどもの国」は、こうした精神を継承し、人と動物とのシンクロナイズを意識し、うたいあげている大森山動物園のテーマ「動物と語らう森」にも影響を与えています。

さて、ここからは開園以降の節目となった整備や出来事を拾い上げてみます。

40年の歳月で展示内容や施設も大きく様変わりしました。開園初期多かった入園者数も減り始めた昭和56年、大森山へのテコ入れとしてサル山が建設されました。その後の動物園運営に影響を与え続けた施設であり、今なお人気スポットの一つとして存在し、大森山動物園成長の原動力を担ってきました。翌年には中国甘粛省蘭州市から友好都市締結の記念として雌雄のフタコブラクダが秋田にやってきましたが、素晴らしい繁殖成績を残し、その子孫は全国で飼育され、中国からの子孫は今なお命をつないでいます。

▼完成した当初のサル山



▲新たに整備されたゾウ舎

こうしたこともあり大森山動物園への関心が高まり、やがて動物園の拡充整備への機運盛り上がりへと変化していったのです。当時、秋田市は市制100周年で幾つかの事業が計画されましたが、その一つに動物園へのゾウ・キリン導入の声が市民や議会からあがったのです。まさに昭和が終わろうとしている頃でした。実際の展示は平成3年4月のことでした。大型動物の導入と動物園の拡充に伴って、大森山動物園は特別会計に移りましたが、これらの整備や出来事は、大森山40年の歴史で特筆すべきものとと言えます。

この時に併せて整備された大型のイヌワシ舎建築はその後、成果を現し、国内でも珍しい森の王者イヌワシの繁殖へと結びつきました。このことは秋田の動物園を全国にアピールすることにもつながりました。

平成9年には、動物とのふれあいを楽しむ「ふれあいランド」が完成、近年の学習プログラム制や動物園の学校利用増加



▲イヌワシの繁殖

▼動物のぬくもりを感じるふれあいランド



に結びついたのです。こどもの心を育む動物園というスタンスもあり、ふれあいランド開設時、こども料金の無料化も始まりました。

平成13~15年にかけては開園当初からの施設であり、ライオン、トラ、そしてチンパンジーまで飼育していた総合動物舎が改修され、「チンパンジーの森」、「王者の森」などが登場しましたが、この時期は、動物園の再整備の必要性が議論された時代でもありました。平成19年から現在の研修ホールミルヴェ館(管理事務所)や森のびょういん(動物病院)、アソヴェの森などの建設が次々と推進された時代でした。

一方、整備とは異なった大森山動物園への市民の意識、イメージを大きく変える出来事もありました。それは、平成14年にあったあの「義足のキリンたいよう」の物語でした。義足の生活が余儀なくされながらも懸命に生きようとした仔キリン、「たいよう」の命への応援は全国的な話題ともなり、時に大森山動物園の存在意義さえも議論の対象にのぼるようになりました。

そうした市民の思いは平成17年の「秋田市大森山動物園条例」の制定となって実を結んだのです。創立後長い年月が経過した動物園が新たに設置理念を内外に示すのは、全国でも珍しいことでした。

そんな動きはさらに、輪を広げ、変わりゆく大森山を支えようと市民ボランティアが発足したのもこの頃でした。



▲義足のキリン「たいよう」と父「ジュン」

▼ボランティアガイドの活動



ガイドや案内役をつとめるボランティアガイド「たいようの会」や花での動物園魅力アップをするガーデンボランティアさんなどです。さらに市民の動物園支援はエサ寄贈などにも広がりを見せるようになる他、平成23年には大森山動物園を本格的にサポートしようと応援会も結成されるようになりました。

さて、最近、建設後40年以上が経過した大森山公園の施設の老朽も問題にのぼるようになり、動物園を公園全体で見直す発想も浮かび上がってきました。大森山公園、動物園を観光資源としてより強化して役割を与えようという秋田市のスタンスの現れでもありました。平成21年度には市民委員会による「大森山自然動物公園構想」がつけられ、公園、動物園の再整備の始まりとしてビジターセンターの建設を最優先と位置づけた計画が進められています。現在の正面ゲートを改修し、総合的な機能を持たせ、ゲートへのバスの乗り入れ、屋上からの動物園展望、遊園地やふれあいランドとの連携回遊の創出、ウェルカム動物でのお出迎え、などなど40周年節目の年に相応しい、大森山動物園・公園の新たなステージの始まりにつなげて行きたいと考えています。

今、動物園の所掌事務に大森山公園全体の管理も含まれる時代になっています。それは公園全体のプロデュースと再整備の推進の役割を担ったということです。公園の中の動物園という意識から、動物園を活かした公園づくりと公園の利用促進に努める役割です。

「動物と語らう森」を大森山の豊かな自然の森にまで広げ、森の命とともに動物の命をも感じることでできる、自然動物公園に変えていきたいものです。日本人が深層で意識する自然と生き物との共生を新たなテーマとして重ね合わせ、施設に常に魂を込めることを忘れることのないようにしながら…。

▼ガーデンボランティアの花壇



飼育レポート

飼育レポート①



チリーフラミンゴのヒナ、初めての冬越し

飼育展示担当 櫻庭 美千代

2012年11月3日、19年ぶりに待望のチリーフラミンゴの雛が誕生しました。

11月の孵化となるとかなり遅めの孵化になります。寒くなると展示場での子育ては不可能です。この雛をどう冬越しさせるかが問題でした。そのまま寝室に入れても、環境の変化やストレスで、親は子育てをしなくなるかもしれません。ある程度親から育てられた雛を途中から人工育雛するとなると大変難しいのです。

そこで考えたのが、寝室のプールに土を入れ人工的に巣を作り、他の大人個体に踏まれないようにチリーフラミンゴと一緒にいたヨーロッパフラミンゴを仕切りで分ける方法です。また、寒さ対策として保温ライトを付け、天井や扉の隙間を塞ぎ、さらに少しでも落ち着くように窓は半分以上隠しました。北国での雛の越冬は他園でも事例がないため、色々な細工を施し、不安の中孵化後13日で親と雛を寝室に引っ越ししました。寝室に入れてから親は巣に近づこうとせず、なかなか雛を巣で抱こうとはしませんでした。もう無理かと思った5日目、ついに親が雛を抱きました。その後、親が雛にミルクを与え、雛と土場を歩き回る姿も見られました。



日に日に育つ雛は、嘴も足もフラミンゴらしくなり、今では自分で餌入れから採食するまで大きくなりました。初めての冬越しチャレンジ、冬場は日光に当たる時間が少ないなど、まだまだ心配はありますが、少しずつ大きくなる雛にぜひ会いに来てください。

飼育レポート②



リスをより身近に

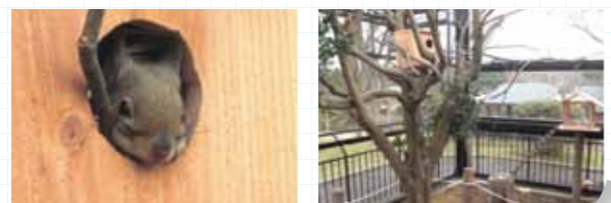
飼育展示担当 佐藤 由香利

2012年12月2日に新施設「リスの木」がオープンしました。

この施設は、前ニホンリス担当の「元気よく縦横無尽に動き回るリスたちをもっとお客さまにより間近でみて楽しんでもらいたい。」「よりリスを身近に感じてもらいたい。」という思いから建設が決まりました。

この施設のポイントはなんと言ってもリスと同じ空間に入ることができることです。中には自然の木があり、リスたちはその上を元気よく動きまわり木の葉を食べたり、餌を探して土を掘ったりと自由に過ごしています。そんな様子を間近で見て、リスの素早さや仕草のかわいらしさを感じてもらえると嬉しいですね。また、エサ台の付近はガラス面になっているため、外からでも小さな手で器用にエサを持って食べる姿もじっくり観察できるようになりました。現在は2012年生まれの子3匹のリスたちが暮らしています。オープン初日、リスたちがどんな動きをするのか不安な部分もありましたが、人が近づいてもそれほど逃げることもなく、巣箱から顔をだしこちらを見るかわいらしいリスの姿を来園者の方々に見てもらえることができ、ほっとしました。

工事で枝葉を落としてしまったため、今は少し寂しげな印象がありますが、ゆくゆくは緑の葉が生い茂る木の上で、リスたちがのびのびと過ごす姿がご覧いただけるそんな楽しい施設になっていけたら良いと思います。元気いっぱい過ごすリスたちにぜひ会いに来てください。リスを見るなら、活動的な事が多い午前中がオススメです。



飼育レポート③



NS乳酸菌の導入について

飼育展示担当 宇佐美 均

飼育動物の健康増進や排泄物から発せられる悪臭抑制、浄化作用による飼育舎の環境改善などの効果を期待し、2012年11月より「NS乳酸菌」を活用した取り組みを始めました。

これは、民間企業や行政等が連携し、地域経済の活性化を目指すための事業展開に動物園が協力したもので、NS乳酸菌の培地には地元の米や大豆、リンゴなどが使用され、培養には廃業した地元の酒蔵と工場が利用されています。

現在、アフリカゾウとボリビアリスザル、ニホンザルとピューマの4種を対象に、粉末と液体を干し草や果物、野菜や肉類など毎日のエサへ添加して与えています。

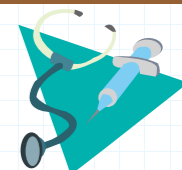
始め、一部の動物で警戒する様子も観察され、エサを残してしまう状況も見られましたが、今では食いつきも良く、ほとんど残すことなく食べてくれる良好な状態が観察されています。投与による効果かは分かりませんが、12月末にはピューマの交尾行動も観察されるようになりました。

エサへの添加の他、獣舎内の異臭元に直接散布する利用も行っています。サル山型式で管理しているニホンザルや室内で観覧出来るアフリカゾウでは、臭いの抑制に少しずつ効果が感じられています。

今後も動物の健康管理とお客さまが快適に動物観覧できる環境作りのためNS乳酸菌の有効利用を展開し、この取り組みが地域企業の活性化へつなげる一助となればと思います。



動物病院から



動物園獣医師の七つ道具 ～麻醉銃～

獣医師 柴田 千秋

動物園が閉園期間に入った昨年12月に、全職員で動物脱出防止対策訓練を行いました。万が一、動物が脱出してしまった場合に私たち獣医師は何をするかというのと、逃げた動物に麻醉銃を撃ち、眠らせるという役割があります。多くの動物園では、そのような事態を想定して、普段から麻醉銃を備えています。種類により異なりますが、現在使用している麻醉銃は、専用の注射器の中にセットして炭酸ガスの力で飛ばすしくみになっています。銃弾を発射することはできませんがそれでも鉄砲ですので、所持するには警察からの許可が必要です。当園では獣医師全員が麻醉銃を使用できるように許可を取っています。ただ、普段の治療では、ほとんど使用することがないので、いざという時に使い方を忘れてしまったり、段取りよく準備できないと困るので、年に数回は麻醉銃の練習をするように心がけています。

先日の訓練では、みんなで追い込んだオオカミ(ボードに描いた絵ですが)に麻醉銃を撃って捕獲するという内容でした。練習用の的以外で撃ったのは初めてでしたが、何とかオオカミの絵に当てることができました。実際は動き回る動物に撃たなければいけないので、そう簡単にはいきません。普段から万が一のことを想定しながら、気を引き締めて備えておくことが大事だと改めて感じました。



動物脱出防止対策演習 ～動物と人の安全のために～

参事 佐藤 佐十志

12月12日、全園挙げて「動物脱出防止対策演習」を実施しました。これは、動物園職員は飼育動物と人の命を預かるという使命の下、動物脱出時において、各自が役割分担を理解し、具体的な動きをイメージすることおよび速やか・的確な情報の伝達共有を目的に行ったものです。想定した事態は、オオカミが展示場扉の間隙から脱出し、園路を徘徊している設定で、逃走経路を遮断した後、動物舎出入口に追い込み、麻酔銃で捕獲するというものです。演習に先立ち、職員の集合配置場所・キャストイング、オオカミの追い込み方法などを周知しました。当日は、積雪の中、着ぐるみをまとった職員が演じる二足歩行のオオカミを捕獲チームが防御ネット、刺叉を巧みに操って目的の場所に誘導し、最後は、一発必中の緊張を背負いながら、狙撃手が麻酔銃で見事に矢的(イラストのオオカミ臀部)に命中させました。準備が良かったのか、シナリオよりスムーズに進み、脱出探知から捕獲まで20分ほどで終了しました。脱出オオカミの定点滞留、麻酔銃による捕

獲、職員全員出勤体制など現実とは少しかけ離れた点もありましたが、演習や訓練は、組織対応能力の限界点を見極め、いかに適確に事態を終息させるかの作業手順を検証し、災害対策実務に反映させる実効手段と考えられます。今回の演習では、捕獲に携わる職員の安全確保、入園者誘導などの課題が浮き彫りになりました。次回は、課題を組み入れながら、開園期間中の演習実施も視野に入れ、取り組む予定です。災害はいつ起こるかわかりません。職員の危機管理に対する意識高揚を図りながら、さらなる動物と人の安全管理体制の構築に努めていきたいと思ひます。



逃走経路の遮断・捕獲場所への追い込み



鎮静状況を確認
(左：的となったオオカミのイラスト)

イヌワシ繁殖検討委員会の開催について

飼育展示担当 三浦 匡哉

大森山動物園が加盟している公益社団法人日本動物園水族館協会では、希少動物の種の保存に力を入れています。希少動物の血統を管理し、遺伝的多様性を保持しつつ、繁殖に取り組んでいこうというものです。

ニホンイヌワシは、野生下では、北海道から九州にかけての全国に生息分布が確認されており、個体数は約650羽と推定されています。繁殖成功率が低下傾向にあるため、将来的に個体数の急速な減少が危惧されています。一方、飼育下では、現在、8園で41羽飼育しています。

大森山動物園は、同協会のニホンイヌワシ種別調整園に指定され、繁殖計画を立てています。これは大森山だけで決めているわけではなく、繁殖検討委員会という会議を開き、検討委員と飼育下の現状と課題を確認し、その解決策について議論し、毎年計画を立てています。

今年は12月5日に大森山動物園で、この会議を開催しました。検討委員は、札幌市円山動物園、盛岡市動物公園、仙台市八木山動物公園、東京多摩動物公園、いしかわ動物園の職員です。当日は、事情により欠席した委員もいましたが、オブザーバーとして、環境省の自然保護官にも参加していただきました。

会議では、野生下のイヌワシのバックアップについて、動物園が期待されていることを改めて認識しました。様々



な課題がありますが、野生由来個体ペアの繁殖に全力で取り組む、飼育下個体の野生復帰を見据えた技術開発に取り組む等の点を確認しました。また、昨年、秋田と盛岡の間で行った有精卵の移動を、今年は秋田と石川の間で挑戦してみようということになりました。

飼育下のニホンイヌワシがバラエティに富み、野生下のバックアップとしての役割が十分果たせるよう、飼育園の協力を得て、計画を進めたいと考えています。



イベント レポート

秋の動物ふれあいフェスティバル

10月7日～8日

動物とのふれあいを楽しめる秋のイベント。大人気の「どうぶつパレード」は2日間開催しました。園路の脇を埋め尽くした来園者からは、動物が通るたびに歓声が上がりました。

今回は新しいイベントとして「大森山動物園クイズ王決定戦」を実施。動物の習性や当園で飼育している動物、個体に関する盛りだくさん内容の問題に、102名の参加者がクイズ王の座をかけて熱い勝負を繰り広げました。決勝に勝ち進んだ8名がさらなる難問に挑み、優勝者「動物園クイズ王」が決定しまし

た。参加者はクイズに奮闘しながらも楽しんでおり、クイズ終了後の楽しみ抽選会も大盛況でした。



いい夫婦の日特別イベント

11月23日

11月22日のいい夫婦の日にちなみ「いい夫婦の日特別イベント」を開催し、県内外から20組のご夫婦が参加されました。キリンやフクロウとの記念撮影やトナカイやゾウのエサやり体験など、普段目で見ることができない動物たちが間近で見られる内容で、どのご夫婦も終始笑顔が絶えませんでした。記念撮影では、キリンが後ろから参加者をびっくりさせる

場面もあり、動物が目の前でみせる茶目っ気あふれる一面に和まされていたようです。当日は、途中雨が降る不安定な天気ではありましたが、2人で1本の傘を差して歩く姿も見られ、まさに「いい夫婦の日」となったようです。



さよなら感謝祭

12月2日

亡くなった動物の霊を慰めるとともに、動物園を訪れてくださったお客さまと動物園の立役者である動物たちに感謝の意を込めて毎年開催している「さよなら感謝祭」。

慰霊祭では、動物たちの遺影を飾った祭壇に出席者の代表がそれぞれ献花した他、追悼の言葉として浜田小学校代表者による作文が朗読され、今年亡くなったシンリンオオカミなど29種53頭の動物たちに感謝の気持ちをささげ冥福を祈りました。



た。また、感謝祭では浜田小学校児童による学習発表や演奏、ボランティアガイドさんによる紙芝居も披露されました。この日はミルヴェンジャー7のステージショーや餅つき大会などたくさんのイベントが開催され、来園者は今年最後の動物園を満喫していました。

雪の動物園

1月5日～2月24日 土日祝日

雪の動物園が始まると、大森山動物園はこれまでの景色から一転して白一色の美しい景色へと変わります。動物たちが見せる表情も変わり、雪の中を元気に走り回る姿や身を寄せ合って寒さを凌ぐ様子が見られます。

今年は記録的な大雪で、開園時間直前まで除雪に追われる日々となりましたが、そんな中たくさんの方が来園してくださいました。

トナカイやポニーのお散歩タイムでは、動物が園内を歩き出すと周りには人が絶えないほどの人気ぶり。また、今年はヘビ年ということで「ミニ干支展」を開催。ヘビに関連した話をパネ

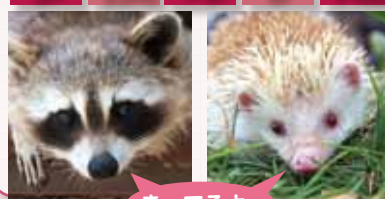


ルで紹介した他、ポアコンストリクターの食事風景の写真や、レントゲン写真、脱皮した皮なども展示しました。ヘビを描いた顔出しパネルでは、ヘビに巻かれたウサギに成り切って撮影している方もいたようです。

この他にも、フリーマガジン『どうぶつにくに』の写真家、田井基文(たいもとふみ)さんの写真展「KIDZOO(キッズー)」も開催。世界中の動物園や水族館で撮影した写真約70点が展示されました。

今後の予定

通常開園は3月16日(土)からスタート!



まってるよ～

2013年の通常開園は3月16日(土)から、12月1日(日)まで休まず開園します。たくさんのイベントを企画して皆さまのご来園をお待ちしています。

【開園時間】午前9時から午後4時30分まで(入園は午後4時まで)

【入園料】大人(高校生以上)700円、中学生以下無料、年間パスポート1,200円


※団体(大人20名様以上)500円、5名以上20名以下の団体様は回数券がおすすめです。

★大森山動物園は、2013年9月1日に40周年を迎えます。★



飼育日誌

9/1	アミメキリン	有料のエサやり体験を開始。キリンの誘導に工夫が必要。	10/16	ハリスホーク	新規個体の搬入(入れ替え)。非常に落ち着いている。
9/2	アフリカタゲギヤマアラシ	6/14出生個体は「おこげ」と命名	10/17	シンリンオオカミ	シンメ、ジュディー♀ ターゲット棒に反応し、フェンス越しにエサを取りに来るようになった。
9/4	アライグマ	♂2頭間の威嚇行動が頻繁に見られる。		ジャンボウサギ	第25回全国ジャンボウさぎフェスティバル実行委員会からジャンボウサギ(♂、♀)の寄贈を受ける。
	シバヤギ	丞之助(♂、2月齢) ♀へのマウント行動が発現。			
	シンリンオオカミ	ジュディー♀ フェンス越しに鶏頭を給餌。警戒しながらも、採食する。	10/21	ニホンリス	全個体を確認。動き活発で、冬毛に生え変わっている。
9/5	キョン	ユウキ♀ 作業時に巣箱に入らず、パニック状態になる。	10/23	コモンマーモセット	9/14出生個体 単独行動する時間が増えている。
9/6	シンリンオオカミ	♀(ハナ、アメ)を常時展示できるよう仕切りを移動。	10/24	カナダヤマアラシ	もずく♂ 糞中に蟻虫を確認。
9/10	チンパンジー	ジュディー♀ たてがみが伸び、夏毛から冬毛に生え変わってきている。	10/25	シバヤギ	ヤムチャ♀ 発情継続。♂の寝室を見て、なかなか外に出ようとしな。
		コムノスケ♀、ノリコ♀、ココ♀、コタロウ♂	10/26	ニホンザル	マイクロチップによる全個体の識別作業終了。
9/11	ワタボウシバンシェ	トラブルなく同居展示に移行。	10/31	コウノトリ	親2羽が巣台からヒナ2羽を追い払うようにクラッターリング。
9/12	ミニブタ	キーパーに近寄ることが多くなっている。	11/1		鳥・豚のインフルエンザ監視体制スタート(3月末まで)
	ヨツビハリネズミ	トン平(去勢)、トン吉(去勢)をストレス発散のため、芝生で遊ばせる。	11/2	ポリビアリスザル	はなび♀、おはぎ♀、イチ♀の3頭でじゃれ合っていた。
9/13	アミメキリン	ハンドリング開始。抵抗なく、手の上に乗った。	11/4	チリーフラミンゴ	ヒナが孵化。♂がフラミンゴミルクを与えていた。
9/14	コモンマーモセット	カンタ♂ フレーメン、追尾行動を確認。	11/5	ホンドタヌキ	闘争により、ポン♂左頸部出血、ポコ♀左後肢咬傷。
9/15	カピバラ	2頭出生。イツキ♂とこもも♀が1頭ずつおぶっていた。	11/7	アライグマ	No.2299♂が屋根から落下し、左第1指の爪を欠損、出血。
9/17	アフリカゾウ	レンホとマツ♀の数回の交尾確認。	11/9	トナカイ	マオ♀ 頭絡装着し、歩行トレーニング。人に付いて歩く。
	ホンドキツネ	高圧ホースで水浴びさせる。大変気持ちよさそうにしていた。	11/10	マーコール	♂群 逆毛、角突き行動顕著。
	アナグマ	体重測定。ホンドキツネ5.36kg、アナグマ5.30kg。	11/12	ジャンボウサギ	格さん♂とビビ♀を同居。交尾4回確認。
9/18	ハクビシン	展示場への移動スムーズ。		ホンドフクロウ	フクジロウ♀ ジャンプアップトレーニング開始。
		キーパーに近寄ることが多くなっている。	11/15	チリーフラミンゴ	ヒナ 順調に成長。足がピンク色から黒色に変化してきている。
9/20	チリーフラミンゴ	ベアの交尾確認。	11/16	アカカンガルー	デニーロ♂とトマノスケ♂がスパーリング。
9/21	ミーアキャット	ベアの交尾確認。	11/23	ニホンイヌワシ	♂個体を入れ替えし、新ペアは西目♀×風斗♂とする。
9/23	ラマ	サキ♀ 顔周りの毛が増え、冬毛に移行してきている。	11/27	アフリカゾウ	♂♀ NS乳酸菌を液状添加した乾草は食いつき良好。
9/24	アカコンゴウインコ	ヒロ♂ 来園者とふれあひながら、散歩トレーニング。	11/29	ボニー	♀♀ NS乳酸菌を液状添加した乾草は食いつき良好。
9/25	アフリカゾウ	メレブは♀と判明。P B F D陰性。			クリン(去勢) 大分体力がついたのか、傾斜道を上り下りして青草を食べていた。
9/28	ノドジロオマキザル	2人体制時の収容訓練実施。発情ホルモン測定のための採尿を開始。			ララ♀ 死亡。仔の行動に特に変化はない。
9/30	エミュー	ナナエ♀ 腹囲膨大し、妊娠している様子。	11/30	アフリカゾウ	夜間、♂♀寝室の仕切りを完全オープンにする。
	ボアコンストラクター	来園者10組がえさやり体験を試行。	12/1	ニホンリス	新設リス舎(リスの木)に♀3匹を移動。せわしく動き回る。
10/1	アフリカタゲギヤマアラシ	終日、室内でとぐろ巻いたまま動かない。体色、眼球も脱皮の徴候なし。	12/2	ジャンボウサギ	助さん♂ 動物慰霊祭に参加。
	タンチョウ	全個体、牛骨をよくかじっている。	12/3	コクチョウ	ヒナ 背中が生毛が抜け、新しい羽が見える。嘴も白くなってきた。
10/2	レッサーパンダ	ヒナ 胴体の羽色が親に似てきた。	12/4	ホンドフクロウ	フクジロウ♀ フライトトレーニングを開始。
	ワビチ	全頭(ユウタ♂、ナナ♀、陸♀)を屋外展示。	12/7	カリフォルニアアシカ	マヤ♀ 倒立姿勢がだいぶ安定してきた。
	ノドジロオマキザル	ナナ、陸で闘争あったが、大事に至らない。		ケヅメリクガメ	カメコ♀ 産卵(11:30~12:00)。
10/3	ファンボルトペンギン	♂ 1日中雄叫びを上げていた。		チンパンジー	全頭 夕方の地震で、放心状態になる。
10/4	アムールトラ	朝方、ナナエ出産。母子ともに元気。	12/8	アカコンゴウインコ	メレブ♀ クレートトレーニング開始。
10/6	ラクダ	人工飼育個体、園内散歩。来園者と記念撮影、タッチング。	12/12	アフリカゾウ	ダイスケ♀ 左後肢から採血。
10/7	ポニー	ヒロシ♂ 動き活発で、まんまタイムの反応もよい。	12/13	ツキノワグマ	動物脱出防止対策演習(想定動物：オオカミ)
10/8	トナカイ	オアシスタイム(水を飲ませながらの動物解説)実施。好評であった。	12/22	コウノトリ	全頭を冬ごもりさせる。糞みはすぐに冬ごもり体勢に入る。
10/9	シバヤギ	秋の動物ふれあいフェスティバル2日目。エフ♀、心音聴取体験。	12/24	アナグマ	移動動物園初日。トナカイ、ラマ、シバヤギなど9種が参加。
10/10	マーコール	カイオウ♀、マオ♀の入れ替え(新ペア：カイオウ♀×スカラ♀)	12/25	ペリカン	2012出生個体2羽の性別判明。ヒナ(大)♂、ヒナ(小)♀。
10/11	アミメキリン	丞之助(♂、3月齢) 性成熟近いため、♀群から隔離。	12/28	ラマ	冬ごもりさせる。動いている気配なし。
10/12	カリフォルニアアシカ	ララ♀ 泥排便を呈し、反応鈍く、目もうつろ。虫卵多数確認。			左青♂と♀の交尾確認。
		リンリン♀ 本日から、採血頻度を3日に1度にする。	12/29	ピューマ	ヒロ♂ 寝室からキーパー通路に出すトレーニング。
10/13	アフリカゾウ	スミコ♀ サバへの反応よく、強化子として効果を発揮。			2回出すことに成功。
		首周りを触れるようになった。	12/31	ニホンイヌワシ	ぴゅー太♂がぴゅー子♀の背頸部をかみながら、10分ほど交尾行動。
10/15	アフリカゾウ	花子♀ トレーニング音符を統一(ブッド：2次強化子 ヨシ：号令解除)。			西目♀が風斗♂に交尾を催促するような行動を確認。
	ブレイードッグ	飼育1年目の新人教育開始。			
		ユズル♂がモール♀の背中にかみついた交尾姿勢をとる。			



お客様の声

- アフリカゾウの採血トレーニングを見ていた来園者。「すごい。」と歓声と拍手。
- アムールトラ(ヒロシ♂)のまんまタイム。「鶏肉と馬肉のどちらが好きですか。体はもっと大きくなりますか。」
- アカコンゴウインコ(メレブ♀)とのふれあいタイム。「尾に付いているストローは、人がつけたものですか。」
- 初めて見るフラミンゴヒナに来園者の目が釘付けになり、「感激、感動」の声多数。
- フラミンゴ舎を見た来園者。「ガラス張りで見やすく、いい写真が撮れた。」
- モモイロペリカン 今までにないくらいピンク色になっている。
- 散歩中に出会った来園者。「かわいい。ミニブタなのに大きい。」
- 妻がポリビア出身の来園者。にこにこしながら「ポリビアリスザルを見たことを妻に伝えます。」
- アシカのエサやり体験者。「大森山動物園は動物が近くてすごい。」
- いい夫婦の日イベント参加者。「フクロウをこんなに間近に見たのは初めて。とてもかわいい。」
- 「極地ペンギンも展示しているといいですね。」
- 新設リス舎の来園者。かわいらしいリスを見て、「動物園に来る楽しみが増えたわ。」
- 「ゾウやキリンにもっと近づきたい。」
- 「もっと自然に近い形で動物を展示してほしい。」
- ミルヴェンジャーショーを初めて見た30代女性。興奮気味に「感動しました。」

かたばた通信
～編集後記～

コミュニケーションは、毎月1種類の動物が表紙を飾ります。今回はシンリンオオカミです。表紙の動物は、その時、その季節、その年を代表する動物になることが多く、今回は今年の干支である「へび」という案も出ました。結果オオカミとなりましたが、それは昨年メスが大森山動物園に来たことやオスの仲むつまじい姿を多くの方に見てもらいたいとの思い、春に2世誕生を期待する願いもあって、今回の表紙に選びました。コミュニケーションの表紙を飾った動物は、その時の動物園の見所の一つです。次はどんな動物が表紙を飾るのでしょうか？お楽しみに。(保坂)